

日本とアジアの水中考古学

九州歴史資料館長
海の道むなかた館長

西谷 正

I. はじめに

日本の水中考古学調査・研究が多くの先学たちの努力によってようやく現代考古学の一分野として認知されるようになってきた。とはいえ、調査・研究の歴史は浅く、その実践例も決して多いとはいえない。調査・研究を担う研究者人口や活動組織についても、世界の調査・研究の先進国に比べると、その後進性は否定できない。

それに比べて、陸上における考古学的調査・研究では、諸外国に勝るともけっして劣らないものがあり、国際的にも、とくにアジアにおいては重要な役割を果たしている。そのような学界状況に照らして、今もっとも急務であるのは、日本における水中考古学の調査・研究体制の確立である。バブル時代に大規模開発に伴って未曾有の発掘調査が行われた。それが落ち着いたいま、立ち止まって考えるとき、調査・研究の対象を陸上から水中へと大きく拡充することの必要性を痛感する。

ところで、私は去る2003年（平成15）6月に、ワシントン D.C. のカソリック大学で開催された第5回世界考古学会議に出席した。その際、世界各地から一千件ほどの研究発表があったが、そのうちには水中考古学の発表が百件近くも見られた。世界の水中考古学は、19世紀にスイスの湖底から人工遺物が引き揚げられたことに端を発し、この分野に対する関心が高まっていった。そして、1943年にフランス人が、スキューバすなわち自給式潜水器もしくは水中呼吸装置を発明してからは、水中における潜水調査が可能になり、調査が大きく進展した。

このような世界の現状にあって、日本における水中考古学の調査・研究の立ち遅れという現状に

鑑みて、アジア諸地域における現況を概観し、今後の展望を模索したい⁽²⁾と思う。

II. 日本

まず日本では、すでに早く明治41年（1908）と大正年間にそれぞれ、坪井正五郎と鳥居龍蔵が長野県の諏訪湖から発見された縄文土器や石器を取り上げている。大正13年（1924）には、小江慶雄が滋賀県の琵琶湖の湖底遺跡に着目したが、昭和に入ると3年（1928）に、島田貞彦が同じく琵琶湖の葛籠尾崎湖底採集の縄文・弥生土器や石器を紹介して、いわば水中考古学への関心を示した。その後、同じ琵琶湖の湖底遺跡に対して、小江慶雄が昭和25年（1950）ごろから本格的に調査を開始し、現在では湖底・湖岸の遺跡は110カ所以上の所在を確認している。琵琶湖最南端に位置する粟津湖底遺跡において、平成2年（1990）から翌年にかけて実施された大規模な発掘調査は、縄文時代中期の魚貝・獣骨・植物の実態などを明らかにしてくれた。そして、昭和63年（1988）には、琵琶湖から流れ出る瀬田川の上流地点に架かる現在の瀬田唐橋の下流約80mのところ、7世紀後半の橋脚が検出された。ここは、『日本書紀』によると、文武天皇元年（672）に、天智天皇の子供である大友皇子を擁立する近江朝廷軍が、天智天皇の弟の大海人皇子（後の天武天皇）軍と戦闘を繰り広げた、壬申の乱の舞台となったところである。ちなみに、琵琶湖湖底遺跡の調査は、昭和48年（1973）から平成3年（1991）まで18年間にわたり、琵琶湖総合開発に伴って発掘調査が本格化した。その後、現在も小江の薫陶を受けた林博通らによって継承される形で、琵琶湖の各地で発掘調

査が実施されている。これまでの成果は、滋賀県立安土城考古博物館の企画展⁽⁵⁾において、公開、展示されたが、遺跡は100カ所に及ぶといわれる。

一方、日本における水中考古学の調査で画期をなすのは、1970年代に入ってからのことである。すなわち、北海道の江差沖で、幕末の徳川幕府の軍艦・開陽丸の沈没船に対する本格的な調査が実施された。まず、1974年(昭和49)に現状確認調査が開始された。そして、翌1975年(昭和50)から1982年の間に、分布調査と、それに引き続いて本格的な発掘調査⁽⁶⁾が行われた。

続いて、瀬戸内海の海域では、1977年(昭和52)に調査された香川県的小豆島沖に当たる水の子岩海底遺跡の調査は、室町時代初期の古備前の流通問題を考える上で重要なものである。同じ瀬戸内海域の広島県福山市の宇治島南方沖では、1988年(昭和63)から翌年(平成元)にかけて3次にわたる延31日間の調査が行われた結果、慶応3年(1867)に沈没した海援隊の用船・いろは丸の船体と積荷の様相がある程度わかった。

その後、1990年代以降では、紀淡海峡の和歌山県の沖ノ島北方海底遺跡の引き揚げ品⁽⁸⁾は、15世紀の貿易陶磁の様相を知る上で参考になる。また、南西諸島では、海底遺跡が25カ所ほど知られる。そのうちのひとつ、奄美大島の鹿児島島の倉木崎遺跡⁽⁹⁾における調査所見は、12~13世紀の東アジア諸地域の貿易陶磁の解明に資するところが大きい。

九州でもっとも注目されるのは、長崎県松浦市の伊万里湾に浮かぶ鷹島の南側海域に当たる海底遺跡である。ここは、二度にわたる元寇のうち、弘安の役の舞台となったところである。この遺跡に対して、昭和55年(1980)度から3カ年計画で、文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」の一部として、「水中考古学に関する基礎的研究」が江上波夫・茂在寅男らによって行われた。この調査では、音響探測機のソノストレーターおよびサイド・スキャン・ソナーを使った水面下の状況調査やダイバーによる碇石・石砲弾・陶磁器片など多数の遺物が引き揚げられた。その過程で、昭和56年には、鷹島南岸域の東西約7.5km、汀線から沖合約200mまでの範囲、約150万㎡が周知の遺跡として公示された。そのため、この範囲内における開発行為は、文化財保護法によって規制されることになった。このことを受けて、港湾整備に関連した事前の発掘調

査や、文部省の科学研究費⁽¹⁰⁾の交付を受けるなど、継続して調査が行われてきた。

さて、現在、日本における水中考古学の調査・研究は、北部九州がセンター的機能を発揮しているといつて過言ではなからう。つまり、調査・研究の組織としては、1986年(昭和61)12月に任意団体として発足した九州・沖縄水中考古学協会⁽¹¹⁾が発展して、2005年に特定非営利活動法人(NPO)となった、アジア水中考古学研究所⁽¹²⁾(林田憲三・理事長)がある。同研究所が近年、調査した遺跡に長崎県の小値嘉島の前湾の海底遺跡などがある。そして、2009年度からは日本財団の助成事業として、「海の文化遺産総合調査プロジェクトー水中文化遺産データベース作成と水中考古学の推進ー」に取り組んでいる。さらに、琉球大学の池田榮史教授が研究代表者となって、平成2005年度には、科学研究費補助金の研究「中世東アジアの交流・交易システムに関する新研究戦略の開発・検討」を、続けて2006年度から5カ年にわたって、科学研究費補助金基盤研究(S)「長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明」のための調査と研究を実施した。この研究では、120k㎡にわたる伊万里湾全域の海底地形と地質の探査を最新鋭の観測機器を使って行い、高密度・高精度の海底詳細地形図が作成され、また、地層探査の結果が得られた。

その結果、これまで鷹島南岸域で検出された元寇関連の遺物は、海底埋積谷に二次的に埋没、集積されたものであることが推測された。したがって、鷹島南岸域から伊万里湾内へと広く分布する埋積谷に対する調査の必要性も生じてきたのである。このたびの調査で、伊万里湾内の約150地点において、海底面上あるいは地層中に異常な強反射体が認められた。そのうち約90地点に対して集中的な精査が行われたところ、約60地点が元寇関連遺物の可能性が高いと推定された。そこで、そのうちの1カ所が2011年に発掘調査⁽¹³⁾されたところ、船体の基底部に当たるキール(竜骨)と外板材などとともに、大量の中国陶磁器や埴などを検出するという大きな成果が上がった。調査はこんごも2015年度まで継続されるので、その成果が期待される。

このことと関連して、海底埋蔵物の判別のため、その内容がすでに確認されている、北海道江差町沖の開陽丸での探査データの取得を目的とする調

査も実施された。その結果、木材と銅製品の判別には、音波探査に使用する音源の周波数を複数用いて、その反応を比較することの有効性が確かめられた。⁽¹⁴⁾

このようにして、伊万里湾に浮かぶ長崎県鷹島南海岸域一帯から伊万里湾全域にわたる調査しいでは、弘安の役の実像解明に展望が開けるようになってきた。そればかりか、ここが現代日本の水中考古学調査・研究の拠点的存在であることを関係者が自他ともに認識するとともに、調査・研究⁽¹⁵⁾の成果を積極的に発信しなければならない。

一方、日本列島海域の各地で調査が推進されるようになってきたことも事実である。その中で、東アジア諸地域との関連において、南西諸島は、益々重要性を増してきているといえよう。

Ⅲ. 韓国

韓国における水中考古学の調査・研究は、その歴史が日本よりはるかに浅いにも拘らず、順調かつ活発な進展を見せている。その契機となったのは、いうまでもなく、西南部の全羅南道新安郡曾島面防禦里道德島沖で発見された、いわゆる新安沖沈没船の調査である。沈没船に係わる陶磁器が1975年に発見され、翌1976年から1984年までの9年間10次にわたって行われた調査成果⁽¹⁷⁾には、測り知れないほど重要で、歴大なものがある。何より重要なものに、至治3年(1323)銘荷札木簡、慶元路銘分銅、陶磁器組成などの出土により、沈没船は中国の慶元すなわち現在の寧波を出航して、日本の博多に向っていた14世紀前半の貿易船であったことがわかった点がある。船に積載されていた大量の中国産貿易陶磁器などにより、当時、東中国海を舞台として展開していた国際的な経済活動の実態をまざまざと見せつけてくれた。

そして、新安沖沈没船の調査がまだ完全には終わっていない1983年末に、そこから東南方へ約100km余りの地点に当たる、同じく全羅南道の莞島郡葉山面漁頭里島で発見された、いわゆる莞島沖沈没船⁽¹⁸⁾がある。大量に積載されていた高麗青磁は、高麗時代初期に近くの海南郡山二面珍山里一帯の窯で焼造され、南海岸の慶尚南道方面の地方の需要層に供給されるべく航行中に沈没したものと推測される。このように、国産の陶磁器の生産と流通の問題を考える上で重要な成果を上げた。これらの調査成果を契機に、その後、西海岸や済州島

において、海底遺跡の発見や調査が相次いで行われることになった。これらの海域では2008年現在、引き揚げ遺物の申告が228件に及んでいる。

たとえば、過去10数年ほどの間では、1995年に全羅南道務安郡海際面松石里前方の道里浦の海底で、14世紀後半の高麗時代後期の象嵌青磁638点が収集された。近くの靈巖郡長興付近で生産され、開城へ運ばれる途中で沈没⁽¹⁹⁾したものとされる。2002年には全羅北道の十二東坡島の海域で、高麗時代前期の陶磁器や船体が発見され、注目を集めた。また、同年に同じ全羅北道の群山市沃島面の飛雁島の東方海域で、12世紀中ごろから13世紀前半という高麗時代中期の青磁が3,172点引き揚げられた。これらの陶磁器は、近くの全羅北道の扶安郡山内面鎮西里や保安面柳川里で生産され、開城方面へ運ばれる途中で沈没⁽²¹⁾したものと推測される。

2007年に、西海岸を北上した忠清南道泰安郡の大島沖でまた大きな発見があった。長さ約8m前後の船体の周辺から、22,000点余りという各種、大量の陶磁器が引き揚げられた。これらは、12世紀中ごろの高麗時代中期の青磁類であるが、共伴した34点の木簡の中にある「耽津」銘荷札木簡から、製作地が全羅南道の唐津郡であり、また、目的地が開京つまり現在の開城であることが確実視される。その中には、青磁鉄絵堆花文蟾形硯のような、これまでに類例のないもの⁽²²⁾が含まれる。

2008～2009年には、同じ泰安郡の近興面馬島の前方面において、高麗時代の長さ10.8mの船舶と1,400点余りの各種遺物が検出された。とくに、座礁の時期や取引関係を知る上で貴重な竹簡53点をはじめ引き揚げられた。すなわち、「大將軍金純永宅上田出租壹石」という竹簡は注目される。金純永は、1199年に將軍に昇進したことが史書に記されている。また、別の木簡と竹簡に書かれた、丁卯年と戊辰年はそれぞれ1207年と1208年に当たる。ちなみに、木簡は19点出土している。

このように、新安沖沈没船の調査以降、2008年までに全部で14カ所の遺跡で、中国船2隻・高麗船6隻の船舶と、8万8千点余りの遺物を引き揚げている。そして、水中考古学調査・研究の専門機関として重要な役割を果たしてきた国立海洋遺物展示館は、去る2009年4月の職制改正で国立海洋文化財研究所に名称が変更⁽²³⁾された。

これまで見てきた調査は、主として国立の研究

機関が担当してきた。一方、最近では民間の機関や地方自治体も調査を分担するようになってきた。まず、財団法人ウリ文化財研究院は、2004年6月の開院以来、各種開発工事に関連して、主に慶尚南道地域を対象に18カ所で調査を行っている。それに対して、慶尚南道が計画し、実施している李舜臣プロジェクトは学術的な調査である。計画によると、2008年から10年間にわたって、総額3,500億ウォン（日本円で約280億円）が投じられるという。その目標は、1592年の文禄の役（壬辰倭乱）の際に、南海岸一帯で沈没した亀甲船の探査、引き揚げである。2008年6月1日から1年間の予定で、慶南発展研究院によって第1次調査が実施された。つまり、まずマルチビームや海底面映像探査機、高周波浅部地層探査機などを用いて、異常物体の確認作業が行われた。その結果、海底地表面56カ所と海底地層57カ所など合計113カ所の異常物体が探査され、それらに対して、潜水調査が実施された。しかし、16世紀と18世紀の磁器類数点が検出されたこととどまり、次年度以降の調査に期待がかけられることになった。

IV. 中国

中国における水中考古学の調査・研究は1973年に、福建省泉州市后渚港内で発見された沈没船の調査を嚆矢とするといっても過言ではない。その際、南宋時代のジャンク船の構造や、各種多量の積載品が明らかになった。1277年7月に台風で沈没したものとされる。その後、水中考古学の調査・研究は、1980年代に入ってから本格化したように思われる。その推進母体となったのは、1987年11月に、当時の中国歴史博物館（兪偉超館長）に開設された水中考古学研究室である。そして、1989年には、日本の水中考古学研究所（田辺昭三所長）と共同で広東省南海川山群島の南海1号沈没船を予備調査したことは画期的なことであった。しばらく空白期間はあったが、2001年から2004年にかけて本格的な調査が行われた。その結果、陶磁器を主として4,500点の遺物や5,000枚近い北宋を主として南宋を含む銭貨などが引き揚げられた。翌1990年には、外国との共同調査に関する法令が公布されて、中国における考古学の国際化は新しい段階に入った。同じ1990年における、福建省定海湾での沈没船に対するオーストラリアとの共同調査もその成果であろう。その結果、宋・

元時代の1号沈没船と、明・清時代の2号沈没船から、それぞれ近くの福州港などから積み出された陶磁器が出土した。

続く1991年には、遼寧省綏中県の三道崗海域において、元代の沈没船が調査されたが、そのときの成果は、1993年に南海1号沈没船の調査成果とともに、日本で巡回展示を通して公開され、引き揚げられた大量の陶磁器が大きな関心を集めた。その間の中国における動向は、『福建文博』1997年第2期の「紀念中国水下考古十年專輯」特集号にくわしい。また、1999年には西沙群島においても調査が実施された。

前述した韓国の新安沖沈没船は、もともと元時代の慶元すなわち現在の寧波を出航したものであった。その寧波において、1978年から翌年にかけて、奉化江の河岸で船着場の遺跡が発掘調査された。ここでは、造船場と思われるドックの遺構や、宋・元時代の龍泉窯産青・白磁などの遺物が検出された。

なお、金沢陽氏によると、これまでに中国で検出された船体は、1973年に福建省泉州市の後渚港で発見された宋代の沈没船をはじめ10例に及ぶとされるが、それらの構造の解明も進められている。そのうち、中国の山東省蓬萊市のいわゆる蓬萊水城で高麗船がはじめて発見されたことは特筆される。さらに、西沙群島における調査成果には目を見張らせるものがある。

V. 台湾

東中国海に浮かぶ台湾島は、その地理的な位置から見ても関心が寄せられるところである。果して、澎湖諸島において、將軍1号船と命名された沈没船が見つかった。藤田明良氏によると、1995年から1998年にかけて調査されたところ、清代の船体の部材や陶磁器などの積荷の一部が引き揚げられた。澎湖諸島では18の島々で宋・元時代の陶磁器が採集されていて、今後の調査が期待される。ここで、とくに注目したいのは、澎湖島出土の陶磁器の糸底に、綱司の墨書を見出すことである。つまり、博多綱首のみならず、東中国海を舞台に活躍した綱首（綱司）の存在が浮かび上がってくるのである。

VI. 東南アジア

東南アジア諸地域もまた、海域史とりわけ水中

考古学にとって重要な地理的位置にある。まずタイには、水中考古学研究センターがあり、近隣のマレーシア・ブルネイなどに呼びかけて、基本技術の研修を行っているといわれる。ところで、タイ湾で見つかった16世紀末～17世紀初に沈没したと推定されるコ・シーチャン1号沈没船に関連して、野上建紀氏によって積荷の陶器類が日本の五島列島山見沖の引き揚げ品と比較、検討されて⁽³⁵⁾いる。

ベトナムでは、1990年から翌91年にかけて、南部ブンタオで発見された1690年の沈没船がよく知られる。ベトナムの陶磁器は、博多をはじめ西日本各地の遺跡で検出されるが、ベトナムと日本の中間に位置する、台湾・澎湖地区およびその周辺海域において、元末明初と明末清初の鉄絵が出土する。このことは東アジアの国際海上貿易ネットワークにおける台湾・澎湖地区の重要性を物語る。1995年にフィリピンのパラワン・パンダナン島沖で見つかった沈没船は、15世紀の前半から中葉に位置づけられるが、引き揚げ品の中には14世紀中葉の元時代の青花も含まれる⁽³⁷⁾という。

最近では、インドネシアのビルトン島海域で発見され、黒石号と命名された沈没船からは、晩唐時代にさかのぼる越州窯産青磁や鞏県窯産青花などの陶磁器が大量に引き揚げられて注目を集めている。もちろん、フィリピンでもパラワン・パンダナン島沖などで調査が実施されている。

Ⅶ. おわりに

以上のように、東アジア諸地域における水中考古学の調査の現況を概観した。主として、沈没船や積荷の引き揚げによって、陶磁器をはじめとした貿易や、東アジア諸国の国内流通といった経済活動の実態解明にとって、水中考古学の調査・研究の成果には測り知れないほどのものがある。それだけに、この分野のさらなる発展が大いに期待されるのである。

ところが、水中考古学の調査には、陸上とちがって莫大な経費を必要とする。とくに、引き揚げ遺物の保存処理には時間もかかる。たとえば、日本では、伊万里湾の鷹島沖海底遺跡の場合、地元の松浦市教育委員会の調査費や文部科学省の科学研究費補助金などによって、調査が継続されてきた。そして、調査を担当してきたのは、民間の研究団体である九州・沖縄水中考古学協会（現・東

アジア水中考古学研究所）や、琉球大学法文学部考古学研究室などである。そして、引き揚げられた出土遺物の保存処理は、松浦市立埋蔵文化財センターなどが当たってきた。しかし、このような状況では、もはや限界の域に達している。そこで、人材育成をもにらんだ恒久的な組織体制づくりや、十分な所要経費の裏付けが緊急の課題となってきた。

そのような日本の現況に対して、韓国では、新安沖沈没船の調査を韓国政府直属の国立文化財研究所が海軍の技術協力を得て実施したことはよく知られている。その後、西海岸から西南海岸の沿岸部で、沈没船が相ついで発見されたこともあって、国立海洋遺物展示館や、そこが発展的に改組されて、国立海洋文化財研究所に継承されていることは、すでに述べたところである。ちなみに、韓国では、新安沖沈没船調査30周年に当たる2006年には、Sea Muse号と名付けられた18tonの水中考古学専用の探査船が建造され、さらに、209tの本格的な調査船が建造中と仄聞する。そして、調査スタッフは55人を擁すともいわれる。

中国では、2001年から始まった南海1号船の調査を契機として、2003年9月、広東省の海陵島に、中国国家博物館が水中考古学の調査の訓練と研究のセンターを設置して、水中考古学調査・研究の本格的な取り組みに着手した。

台湾では、藤田氏によれば、前述の將軍1号沈没船の調査に関連して、台北市の国立歴史博物館では、2000年に「海峡兩岸水下考古学學術検討会」と、2001年に「澎湖沈船將軍1号水下考古学研究展」お相ついで開催して、調査成果の検討に加えて、その啓蒙・普及にも役立ったと思われる。

このように見てくると、日本でも水中考古学の調査・研究に国家レベルでの取り組みがもっともいま求められているのではなからうか。そして、東アジア諸地域で、それぞれ独自に進められている水中考古学の調査・研究について、国際的な連携と協力関係の確立もまた差し迫った課題といえよう。その点で、昨2010年9月に福岡で開催された第2回日韓共同水中考古学研究会のような国際交流の芽を、まずは大きく育てていきたいものである。

注

- (1) 2003年7月5日付『朝日新聞』西部版 夕刊

- (2) 本稿は、2004年（平成16）10月17日に開催された、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「中世考古学の総合的研究」のシンポジウム『東アジアの水中考古学』において行った基調報告「東アジア水中考古学の世界」をもとに、このたび加筆したものである。
- (3) 小江慶雄，1978「水中考古学の提唱と課題」『水底の謎をさぐる水中考古学』大阪市立博物館
- (4) 林博通，2001「琵琶湖湖底遺跡研究序論」西田弘先生米寿記念論集『近江の考古と歴史』真陽社
林博通，2004『尚江千軒遺跡 琵琶湖湖底遺跡の調査・研究』サンライズ出版（株）
- (5) 滋賀県立安土城考古博物館，2009『水中考古学の世界ーびわこ湖底の遺跡を掘るー』財団法人滋賀県文化財保護協会，2010『びわこ水中考古学の世界』
- (6) 江差町教育委員会，1982『開陽丸 海底遺跡の発掘調査報告Ⅰ』開陽丸引揚促進期成会
- (7) 水中考古学研究所・財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2006『沈没船（19世紀のイギリス船）埋没地点遺跡』発掘調査報告書ー推定いろは丸ー』
- (8) 和歌山市教育委員会，1997『和歌山市加太友ヶ島沖出土の陶磁器』
- (9) 宇検村教育委員会，1998『鹿児島県宇検村 倉木崎海底遺跡発掘調査概報』『宇検村文化財調査報告書』第1集
宇検村教育委員会，1999『鹿児島県大島郡宇検村 倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』『宇検村文化財調査報告書』第2集
- (10) 西谷正編，1992『鷹島海底における元寇関係遺跡の調査・研究・保存方法に関する基礎的研究』平成元年～3年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書，九州大学文学部考古学研究室
- (11) 九州・沖縄水中考古学協会，1991『NEWSLETTER』Vol.1 No.1
- (12) アジア水中考古学研究所，2005『水中考古学研究』創刊号
- (13) 池田榮史・根元謙次編，2009『長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明』琉球大学法文学部考古学研究室
池田榮史編，2011『長崎県北松浦郡鷹島周辺海底に眠る元寇関連遺跡・遺物の把握と解明』（最終報告書）
池田榮史，2012「長崎県松浦市鷹島海底遺跡の発掘調査」『戦跡からみたモンゴル襲来ー東アジアから鷹島へー』九州史学会シンポジウム資料集、九州大学大学院人文科学研究院
- (14) 根元謙次・池田榮史編，2009『北海道江差町開陽丸音波探査報告』琉球大学法文学部考古学研究室
- (15) 文化庁，2000『遺跡保存方法の検討ー水中遺跡ー』
- (16) 宮城弘樹，2010「南西諸島の水中文化遺産の概要」『第2回日韓共同水中考古学研究会論文集』アジア水中考古学研究所
- (17) 大韓民国文化公報部文化財管理局，1983～1988『新安海底遺物（資料編・総合編）』
- (18) 大韓民国文化公報部文化財管理局，1985『莞島海底発掘報告書』
- (19) 国立海洋遺物展示館，1995『務安道里浦海底遺物』開館1周年記念特別展（図録）
- (20) 国立海洋遺物展示館，2005『群山十二東波島海底遺蹟』『国立海洋遺物展示館学術叢書』8
- (21) 国立海洋遺物展示館・全羅北道，2004『群山飛雁島海底遺蹟』『国立海洋遺物展示館学術叢書』7
- (22) キム・ビョングン，2007『多量の高麗青磁を積載した運搬船発掘』『韓国考古学ジャーナル』2007，国立文化財研究所
文煥哲，2008『忠南泰安大島沖水中発掘調査概要』『第1回韓・日共同水中考古学研究発表会論文集』韓・日共同水中考古学研究会
- (23) 国立海洋文化財研究所，2009「700年前に沈没した高麗時代青磁運搬船」『韓国考古学ジャーナル』2009，国立文化財研究所
国立海洋文化財研究所，2009『年報』
魯京正，2010「忠南泰安郡馬島の沖における水中発掘調査の概要」『第2回日韓共同水中考古学研究会論文集』（前出）
- (24) 沈奉謹・鄭義道，1999『鎮海齊浦水中遺蹟』『古蹟調査報告書』第29冊，東亜大学校博物館
- (25) 兪炳球，2010「韓国における水中考古学の現況」『第2回日韓共同水中考古学研究会』論文集（前出）
- (26) 泉州湾宋代海船発掘報告編写組，1975「泉州湾宋代海船発掘簡報」『文物』1975年 第10期
福建省泉州海外交通史博物館，1987『泉州湾宋代海船発掘と研究』海洋出版社
- (27) 張威，1997「南海沈没船の発現と預備調査」『福建文博』1997年 第2期
張威，2004「中国南海1号南宋沈没船遺跡調査」平成16年度シンポジウム『東アジアの水中考古学』資料集，琉球大学法文学部考古学研究室

- (28) 1992「中国福建省連江県定海村に於ける 1990 年度の調査と試掘報告」『中国歴史博物館館報』
栗建安, 1997「定海水下文物的発現及其相關問題」
『福建文博』1997年 第2期
- (29) 張威編, 2001『綏中三道崗元代沈船』『中国水下考古報告系列』(1), 科学出版社
- (30) 朝日新聞社, 1993『中国・南海沈船文物を中心とする－はるかなる陶磁の海路展』図録
- (31) 林士民, 1981「寧波東門口碼頭遺址発掘報告」『浙江省文物考古所學刊』
- (32) 国家文物局, 2001『1999 中国重要発現－中国首次遠海水下考古－』文物出版社
- (33) 楊式昭, 2004「台湾澎湖海域の清代沈船將軍1号の発掘調査」平成 16 年度シンポジウム『東アジアの水中考古学』資料集(前出)
- (34) 藤田明良, 2003「台湾澎湖諸島の交流史と水中調査の現状－海域史と水中考古学－」『わたつみのタイムカプセル－アジアの水中考古学最前線－』九州・沖縄水中考古学協会 第2回學術シンポジウム
- (35) 九州・沖縄水中考古学協会, 小値賀町教育委員会, 2002『山見沖海底遺跡』『小値賀町文化財調査報告書』第16集
- (36) 盧泰康, 2010「台湾と澎湖で発見されたベトナム鉄絵陶磁器」『東南アジア考古学』第30号
- (37) 森村健一, 1996「フィリピン・バンダナン島沖沈没船引き揚げ陶磁器」『貿易陶磁研究』16

(この論文は、筆者の「東アジアの水中考古学」(『文明研究・九州』) 第5号、比較文明学会九州支部、2011)をベースに若干の加除修正を行ったものであることを断っておく。)